

聞き手による評価を示す反応が語りの達成に果たす役割

犬飼亜有美(仙台高等専門学校)

1. はじめに

雑談の中には、一人の話者が一定期間にわたって発話を続ける「語り」がしばしば現れる。語りは単なるありきたりな出来事の報告ではなく、語り手がその出来事に対して抱いた評価や感情を伴い、それゆえに伝えるに値すると判断され語られるものである (Labov, 1972)。そのため、語りが適正に終結を迎えるためには、聞き手が語りの内容や語り手が語りを通して伝えようとしていた意図を正しく理解し、その理解を実質的発話によって示すことが必要となる (Jefferson, 1978; 甲田, 2015)。また、語りの聞き手は、語りが核心部分に差し掛かると感嘆詞や形容詞 (「え:」「うわ:」「やばい」など) を用いて語りへの評価を示すことが指摘されている (筒井, 2012)。しかし、語りにおける聞き手の評価の反応が具体的にどのような位置で出現し、語りの達成という観点においてどのような役割を担っているかは未だ明らかにされていない。したがって本研究では、雑談中に現れる語りにおいて、語りの聞き手がその語りに対する自らの評価や態度を示すことが、語りの達成にどのように貢献しているかを示すことを目的とする。

2. 先行研究

会話は話者が順番を交替しながら構成されるものであり、順番の移行に適切な場が訪れると、話者を交替するか、現在の話者が引き続き話し続けるかがその都度選択される (Sacks, Schegloff, and Jefferson, 1974)。ただし、一人の話者がしばらくの間発話を続ける語りにおいては、上記の順番交替のシステムが一時的に停止し、語り手以外の話者は聞き手として参加することとなる。語りの聞き手は、一般的に語りが行われている間は発話を控えることが期待されるが (Sacks, 1989)、実際は語り手の発話を受け取ったことを示す反応を示しながら語りを支持している (串田, 2009)。

聞き手の反応の出現位置にはある一定の秩序が存在する。西阪 (2008) は、発話の順番構成的完結性と表現形式的完結性という概念を用いて、聞き手の反応が観察できる位置を分析している。順番構成的に完結している発話は、表現形式的に完結している場合もあれば、表現形式的には未完結である場合もある。順番構成的にも表現形式的にも完結している発話とは、必ずしも句点によって区切ることができる形式をしているとは限らないが、終結の音調が下降したり、質問であることを際立たせる形で音調が上昇したりすることで、完結を志向している発話である。これに対して、順番構成的に完結しているが表現形式的に未完結な発話とは、「前後の発話とともに、1つの表現形式的に完結したまとまりを作りだすような発話」(西阪, 2008: 86) である。一方、発話が順番構成的にも表現形式的にも未完結でありながら聞き手の反応の機会となっている場所も存在し、西阪 (2008) はこれを反応機会場と呼んでいる。反応機会場は、単語の語尾にある、語尾が延ばされることがある、「さ」「ね」などの区切りをあらわす標識を伴うことがあるなど、何らかの区切りであることが示される一方で、音調が少し上がるなど、発話にさらに続きがあることも示されるという特徴を持つ。聞き手は反応機会場において、「はい」「うん」「ええ」などの短い反応を示し、聞いていることの表示や発話の継続支持を行っていると考えられる。

3. 分析方法

本研究で使用するデータは、日本語母語話者二名 (友人・知人同士) による、食事の場における雑談を録音・録画したものである。収集した会話データから一人の話者が経験や出来事などについて語っている「語り」の部分を抽出し、語りに対する聞き手の評価の反応の出現位置、およびその前後に見られる語り手と聞き手の相互行為を分析し、聞き手の評価の反応が語りの達成にどのように関与しているかを考察した。なお、会話は西阪ほか (2008) の「トランスクリプト (転写) に用いた記号の一覧」に基づいて文字化した。

4. 結果と考察

分析の結果、聞き手が語りに対する評価を示す反応は、順番構成的・表現形式的に未完結である反応機会場 (4.1)、順番構成的・表現形式的に完結している位置 (4.2)、順番構成的に完結しており表現形式的に未完結である位置 (4.3) で見られ

た。以下では、それぞれの位置で見られた聞き手の評価の反応が、語りの達成において担う役割を考察する。

4.1. 反応機会場における聞き手の評価の反応

反応機会場は表現形式的にも順番構成的にも未完結の位置であり、聞き手にとっては語り手の語りがまだ先に続くことが認識可能な位置である。以下の断片 (1) では反応機会場と見られる位置が多数出現しており、聞き手 F は聞いていることを示す「うん」というあいづちで反応しているが、聞き手にとって留意すべき情報が提示された直後には感嘆詞による短い評価の反応を示す様子が観察された。

(1)

01 E	なんか, (0.2) 去年さ?	13 E	一応普通の一般:, (0.3) 受験で:,
02 F	うん	14 F	うん.
03 E	うちの進学:, (0.2) あ進学:, 受験:, 塾っていうか:,	15	(1.0)
04 F	[うん.	16 E	公立の, (0.2) 理系に行きたいみたいな.
05 E	[そういうとこだから:,	17 F→	お:.
06	(0.2)	18	(0.5)
07 F	ああ:.	19 E	っていう中国籍の子がいて:,
08 E	<そこに:, >キタ高校の子で:,	20 F→	ほお:h
09 F	うん.	21 E	でも, ご両親は:,
10	(0.4)	22 F	うん
11 E	なんか:,	23	(0.5)
12	(1.6)	24 E	全く日本語を家で使わないから:,

断片 (1) は、この先語りを進めていく上で必要な前提となる情報が提示されている部分であり、この時点では出来事の顛末や E がこの出来事を語る意図を判断できない。そのため聞き手 F は 02, 04, 07, 09, 14 行目において、聞いていることの表示や継続支持の反応を示し語りの先を促している。一方、17, 20 行目では、他の反応と異なり「お:。」「ほお:h」という感嘆詞で反応している。これらの反応は、直前に提示された情報が、この先の語りの展開において留意すべき情報であると認識したことを表示していると考えられる。08-19 行目は、E がこの語りの中心人物がどのような存在であることを説明する発話となっており、16 行目の発話からこの人物が「キタ高校の子で、一般受験で公立の理系に行きたい子」であること、さらに 19 行目の発話で「キタ高校の子で、一般受験で公立の理系に行きたい中国籍の子」であることが明らかになっている。聞き手 F は、16 行目「公立の理系に行きたい」19 行目「中国籍の子」といった情報がこの先の語りの展開を方向付ける重要な要素であると認識し、またそのように認識したということの評価の反応によって語り手に表示している。

ただし、仮に 17, 20 行目の聞き手 F の反応が「うん」のような継続支持であったとしても、語りの進行上特に問題はないように思われる。反応機会場で見られる評価の反応は、聞き手が語りの中で提示されたどの情報に注目したかを示すことを可能にするが、語りの進行において必須の要素ではない可能性が高い。

4.2. 順番構成的・表現形式的に完結している位置における聞き手の評価の反応

語りが順番構成的に完結する位置は、基本的に語りの終結部分に現れる。語りの終結部分では、多くの場合、語りのオチに相当する核心的な情報が提示され、語りが最も盛り上がりを見せる。また、語りの核心部では、語り手がその出来事に対して抱いた評価や感情、つまりその出来事を語った意図も示される。以下の断片 (2) は、L が「高校の卒業式の後の HR で、担任が『10 年後の同窓会で全員揃ったことがない』と言い出した」と語ったあとの部分である。

(2)

01 L	なんでだと思います?とかってニヤニヤしながら
02	なんか:, (0.1) でなんーなんか全員, 全員に聞いてきて:,
03	(0.4)
04 L	そしたら:,
05	(3.2)
06 L	誰か1人は亡くなっちゃうんですよ:。って
07	(0.1)
08 K→	うおおお(h)ほ(h)[ほ(h)ほ(h)(.)ふふふふふふふ
09 L	[<お:::っとおまえそれは:, >みたいな
10	お前卒業式の日にそれ言うか?:[って()]
11 K	[ふっふっふ, ふはっ,
12 K	[クールポコの前振りみ[たいにこゆうな(h)よ(h)]
13 L	[ん(h)は(h)は(h) [ん(h)ふ(h)ふ(h)は(h)は(h)は(h)]

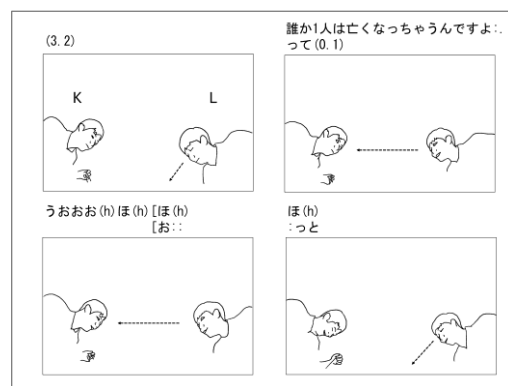


図1 06-09 行目における L の視線の変化

06 行目の「誰か1人は亡くなっちゃうんですよ:。って」という発話は、この語りのオチに相当する。「誰か1人は亡くなっちゃう」という話は、卒業式の日に担任が卒業生に伝えるには不穏であり、めでたい場に相応しくない不穏な話をされた

ことに対する気味の悪さや驚きを伝えることが、この語りの意図であるともいえる。この発話に対し、聞き手Kは08行目で「うおおお(h)ほ(h)ほ(h)ほ(h)」と笑いが混ざった感嘆詞で反応しており、Lが語った出来事の「普通でなさ」を、驚きをもって受け入れたことを示している。聞き手Kが評価の反応を示すと、Lは10行目「くお:::っとおまえそれは:、>みたいなお前卒業式の日にそれ言うか?って」とこの出来事に対するL自身の評価を明示し、聞き手Kも12行目「クールポコの前振りみたいにゆうな(h)よ(h)」という実質的発話によって「卒業式の日に相応しくない不穏な話」を受領したことを示し、この語りは終結を迎えている。図1は語りの核心部分におけるLの視線を示したものである。05行目に3.2秒の間があり、Lは下の方に視線を向けているが、語りの核心である06行目の発話を行う際にKへと視線を向け、Kの反応をモニターしている。LはKが08行目で「うおおお(h)ほ(h)ほ(h)ほ(h)」という評価の反応を示したことを確認すると、09行目の「お:::っとおまえそれは:」の「お:::」の途中から再び視線をそらして発話を続けていた。ここから、語り手は語りの核心的な情報を提示する際、聞き手が語りの核心情報を受け入れ、かつ語りの意図を正確に捉えたかどうかを確認するために、聞き手の行動をモニターしていると考えられる。聞き手の評価の反応は、語りを受けて聞き手が抱いた感情を端的に表示するものであり、この評価の反応により、語り手は語りの意図が正しく聞き手に受け入れられたかを判断することが可能になる。

なお、聞き手の評価の反応を引き出した06行目の「誰か1人は亡くなっちゃうんですよ:。って」という語り手の発話は、担任のセリフを引用する「って」で終わっており、述語（「言った」）が省略されている。しかし、この発話は語りの最終的な着地点としてデザインされており、この先に文が續かなくとも発話が終わったものとして認識されることが考えられるため、順番構成的に完結したものと捉えることができる。このように語りの核心部分が提示され順番構成的に完結している位置において、「うん」のような継続支持の反応が起これば、語り手は聞き手が語りの意図を受領したか否かを判断できない。したがってこの位置では、聞き手が語りの意図を受領したことを表示できる反応が期待されるといえる。ここで即座に聞き手が語りの内容や意図に対する理解を実質的発話によって示すことも可能だが、断片(2)では、いったん評価の反応によって語りの意図を受領したことをのみを示し、その後実質的発話によって語りへの具体的な理解を表示している。

4.3. 順番構成的に完結しており表現形式的に未完結である位置における聞き手の評価の反応

断片(2)の核心部分の発話は、述語の省略はあるものの、その先に発話が續かないことが認識されやすい形式であった。一方、表現形式上は未完結のように見えるものの、文脈との関係から順番構成的に完結していると見られる位置でも聞き手の評価の反応が観察された。以下の断片(3)は、Hが「友人が6年ほど医者と付き合っていた」と語ったあとの部分である。

(3)

01	H	あの<結婚するから>ってために、そいつが、(0.1)
02		医者がね?その:、三年目の、二年目か。さんね
03		三年目か。三年目の研修で沖縄に行くつつ
04		[たときに:]
05	G	[ん↑ん::]
06		(0.3)
07	H	まあ、そこに、<↑ついてあ、>>辞めてく
08		↑ついてった:子がいて、
09	G	う[↑::ん
10	H	[その子も、<私が別れた三日前に>別れてて(h):、
11		(0.2)
12	G→	や[::::::っば
13	H	[ははっ。しかも相手:、相手結構クズで:]

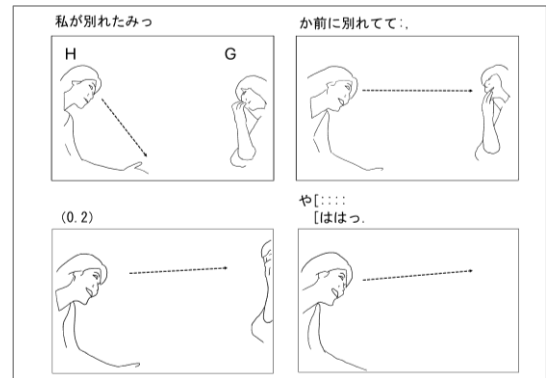


図2 10-13行目におけるHの視線の変化

この語りの前には、Hが仕事を辞めて恋人の異動についていこうか悩んでいたが、その後破局したため、仕事を辞めなくてよかったという語りがなされている。断片(3)では、Hの友人は結婚するために仕事を辞めて恋人についていったのに破局したというエピソードが爆的に語られ、H自身とHの友人とを対比させる形で展開している。断片(3)においては、この語りの結末にあたる10行目の「その子も、<私が別れた三日前に>別れてて(h):、」という発話が語りの核心に相当する。この発話に対して、聞き手Gは12行目で「や::::::っば」と形容詞による評価の反応を示し、Hの友人に起きた出来事の重大さを受け入れたことを表示している。HはGの反応を受け、「しかも相手:、相手結構クズで:、」とHの友人の相手に関する新たな話題を導入している。図2は語りの核心部分におけるHの視線の変化を示している。10行目において、Hは「<私が別れた三日前に>」をゆっくりと発音することで強調し、「三日間」の「か」の位置で聞き手Gに視線を向けている。GはHと視線が合った直後に驚きの表情となり、Hの「別れてて(h):、」という発話が終わると、11行目の0.2秒の沈黙の間に、机に肘をつき口元に手を置いていた体勢からゆっくりと体を背中側に倒して画面から姿を消し、12行目の「や:::~::~:っば」という発話を行っている。HはGが表情や身体動作で驚きを表示している様子を確認し、13行目で新たな話題を導入する発話を行っている。なお、Hは語りの核心部分である10行目「別れてて(h):、」という発話の後、すぐに次の発話に移行するので

はなく、聞き手Gの反応を確認する間を設けている。つまり、12行目の聞き手Gの評価の発話は、聞き手が語りの意図を正確に捉えているかどうかを語り手が確認する手段となっており、語りの円滑な終結を導く1つの要素となっている。ここから、断片(2)と同様、語りの核心部分の直後に聞き手の評価の反応が出現することによって、聞き手が語りの意図を正確に受け入れたかどうかを語り手が判断することが可能になっているといえる。

聞き手の評価の反応を引き出した10行目の「その子も、〈私が別れた三日前に〉別れてて(h):,」という発話は、「て(h):,」と語尾が延ばされ、やや上がり調子であることから、音調的には先に発話が続くような形である。しかし、そこまで語られた情報との関係から、「その子も、〈私が別れた三日前に〉別れてて(h):,」という発話は、これ以上先に発話が続かなくとも語り手がこの出来事を語った意図を判断するのに十分な情報を備えているといえる。また、Hはこの10行目の発話の直後に聞き手Gの反応を何う行動を取っており、聞き手の反応を得てから次の発話へ移行しているため、語り手はこの位置で聞き手が順番を取り何らかの反応を示すことを期待していたものと推測できる。白川(2009)では、このように従属節のみで主節を伴わないが意味的に完結している文を「言いさし文」と呼んでいる。言いさし文は、「文脈に依存して完結性を獲得している」(白川, 2009:161)文であり、「言いきりの形式と等価の完結性を備えているように見える」(白川, 2009:161)という特徴を持つ。ここから、10行目の発話は言いさし文に相当し、表現形式的には未完結であっても文脈上意味的に完結しており、同時に順番構成的にも完結しているものと捉えられる。

以上のように、語りの核心部分の直後に見られる聞き手の評価の反応は、語りの核心部分で示唆される語りの意図を受領したことを表示する役割を果たしており、また、語り手が聞き手に語りの意図が正確に伝わっているかどうかを判断する下地として機能していると考えられる。

5. まとめと今後の課題

語りにおける聞き手の評価の反応は、反応機会場と順番構成的に完結している位置とで観察された。反応機会場における聞き手の評価の反応は、提示された情報が聞き手にとって留意すべき情報であることを示すが、語りの進行上必須の要素ではなく、継続支持等の反応と置き換えが可能である。一方、順番構成的に完結している位置における聞き手の評価の反応は、主に語りの核心部分が提示された直後に見られ、語りの核心部分で明らかになった語りの意図(語り手がその出来事に対して抱いた評価や感情)を受領したことを示していた。語りの核心部分における聞き手の評価の反応は、語りの意図が正確に伝わっているかを語り手が判断する手段となっており、この位置で継続支持等の反応が起きると、語り手は語りの意図が聞き手に伝わっていないと判断する可能性が高い。なお、白川(2009)は、日本語学習者にとって「言いさし文」の理解が難しい可能性を指摘している。今後はさらにデータを増やし、語りにおける聞き手の種々の反応が語りの達成において果たす役割を分析するほか、日本語母語話者と日本語学習者による接触場面会話の分析、および母語場面会話との比較を行い、日本語会話における聞き手行動の指導に繋げていきたい。

参考文献

- Jefferson, G. (1978). Sequential Aspects of Storytelling in Conversation. In Shenkein, J. (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*. New York: Academic Press, pp.219-248.
- 甲田直美 (2015). 語りの達成における思考・発話の提示 社会言語科学, 17(2), 24-39.
- 串田秀也 (2009). 聴き手による語りの進行促進—継続支持・継続催促・継続試行— 認知科学, 16(1), 12-23.
- Labov, W. (1972). *Language in the inner city*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- 西阪仰 (2008). 発言順番内において分散する文—相互行為の焦点としての反応機会場— 社会言語科学, 10(2), 83-95.
- 西阪仰・串田秀也・熊谷智子 (2008). 特集「相互行為における言語使用: 会話データを用いた研究」について 社会言語科学, 10(2), 13-15.
- Sacks, H. (1989). An Analysis of the Course of a Joke's Telling in Conversation. In Bauman, R. & Sherzer, J. (ed.), *Explorations in the ethnography of speaking, Second edition*, pp.337-353. Cambridge: Cambridge University Press.
- Sacks, H., Schegloff, E. A. & Jefferson, G. (1974) A Simplest Systematics for the Organization of Turn-taking for Conversation. *Language*, 50(4), 696-735.
- 白川博之 (2009). 「言いさし文」の研究 くろしお出版.
- 筒井佐代 (2012). 雑談の構造分析 くろしお出版.